

## 農と食のコラム

## 田園回帰とシェアハウス

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄—

西東京市に住んでいた友人のMさんが千葉県のみすみ市に移住し、シェアハウスで暮らしているというので出かけてみた。いすみ市は夷隅町、岬町、大原町が2005年合併したもので、地図上は房総半島の南東部にあって太平洋に面しているが、移住先の能実（のうじつ）は旧夷隅町の海から大分入った山間部にある。

茂原市の郊外に続く畑地から丘陵を超えて能実に出ると、里山へと風景は一変する。おコメがよく実る豊かな地であることから夢窓国師が能実と名付けたとされるが、山を背にして古民家が点々と並び、その前に広がる水田が織りなす景観は息をのむほどに美しい。

ここに「いすみ古民家シェアハウス」星の家」はある。築140年でリフォームされた古民家で、ここにある五つの部屋をシェアしながら、台所や居間、バス、トイレは共用し、食事は夕食の時間が合えば一緒にするという緩やかな共同生活を行っており、2012年6月にスタートしている。

筆者が訪れたこの8月、Mさんを含めて住人は3人で、近々2人がこれに加わる予定という。オープンして3年ちょっとが経過しており、

Mさんは住人として11人目だそうだ。ここにしばらく住んでみて、この地に定住することを決め、別途に家を確保して出ていく人もいれば、都会に戻る人もいるなど、移住してきた人のその後の動きはさまざまのようだ。

訪れた夜、住人3人と酒を酌み交わしながら話を聞く機会を得たが、田園回帰とはいっても農業に従事するだけではないことに、新鮮な驚きを感じた。

Mさん（女性）は、すでに何か所かで援農や市民農園を経験しており、しばらくはここに腰を落ち着けて農業に取り組もうとしている。しかしながらIさん（32歳、男性）は冠婚葬祭の会社に勤務しており、もう一人のHさん（23歳、男性）は大工見習い中である。

Iさんの場合、「都会はとても住めるような場所ではない。自然の豊かな場所に住みたい」というのが当地に来た理由と言う。今の仕事にはそれなりのやりがいを感じているそうだが、正社員になる気はなく、あくまで仕事は楽しみながらやりたいと言う。Hさんは大学で建築学科を専攻し、今年の春に卒業はしたものの、大学では図面を引いたり計算をしたりがほとんどで、肝



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

〔主な経歴〕

東北大学経済学部卒業、1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長、常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表

〔主な著書〕

「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）など

心のモノづくりを経験することができなかった。このままゼネコンや設計事務所等に就職したのでは体にモノづくりの感覚を染み込ませる機会を得ることはできなくなると考え、一念発起して当地の大工の弟子になって修行することにしたという。

使われていない古民家が増えており、これをシェアハウスとして田園回帰の受け皿に活用していくことは、移住してきた若者たちがつながりを作り、情報交換していくことも含めてメリットは大きい。問題はここから先で、シェアハウスは定住する場所ではなく、住人の大半はしばらくしてここを離れる。この間に彼らが定着できるだけの条件整備が図れるかだ。新規就農支援だけでなく、地域ぐるみで活躍できる場を広く提供する体制づくりが不可欠だ。

[＜表紙・目次へもどる＞](#)